ごあいさつ

第４回「神籠石サミット」久留米大会の記念講演会・シンポジウムを開催するにあたりまして、ご挨拶申し上げます。

本日、シンポジウムにご参加いただきますパネラーの皆様方には、公務ご多用の中をご出席いただきまして、厚くお礼を申し上げます。

現在、「神籠石」は列石を山が取り巻くように配置した遺跡で、古代の山城跡ではないかと考えられています。「神籠石」の名称を冠した国指定史跡は、全国に９ケ所存在します。しかし、これほど大規模な遺跡であるにもかかわらず「日本書紀」や「続日本紀」などの史書には明確な記載がなく、造られた時期や目的、全体構造など未知の部分が多く残されております。今回のシンポジウムのテーマは「神籠石の成立とその背景」と題しまして、「神籠石」の名称の発祥の地として知られております久留米市の「高良山神籠石」等の構造や目的を探ろうとするものであります。

このシンポジウムによって、全国に誇れる貴重な文化遺産であり、歴史的資源であります「神籠石」の魅力を全国の歴史ファンに伝えるとともに、多くの謎に包まれた「神籠石」の調査・研究が進められることを願うものであります。

最後に今回の第４回「神籠石サミット」久留米大会の開催にあたりご支援ご協力いただきました関係者の皆様に対しまして、感謝と敬意を表しますとともに、これを契機に文化財保護意識の普及や文化財愛護精神の高揚に向けた取り組みが、さらに推進されることを願うものであります。

平成２１年１０月３１日
第４回「神籠石サミット」久留米大会
実行委員会長 久留米市長 江 藤 守 國

古代山城分布図

記念講演

神籠石と古代史

亀井輝一郎(福岡教育大学教授)

(1)

わが国の古代山城は、大きくは①神籠石系山城と②朝鮮式山城の二種類に分類されてきた。遺構の構造・技術的な面での差異を指摘する考古学等の考察とともに、文献史料の上でも記録に残されている②に対して、①に分類される山城の記録が全く残っていないことは周知のことである。また、古代東国には対蝦夷施設をはじめ城柵や城の存在は遺構・文献いずれも残っているが、①②の古代山城は東国には分布がみられないことも注意してよいであろう。中国に「南船北馬」という言葉があるが、わが国でも東国・西国の特徴を「西船東馬」と表現することができそうである。東国の陸路・馬に、西国は海路・船を対置することができよう。その船は単に西国にとどまらず、瀬戸内海を中心に朝鮮・中国へ通じる海の道でもあった。このことは畿内勢力であるヤマト王権の国内統一過程における東国と西国のもつ政治的・軍事的・文化的等の意味・位置付けの相違を予想させるものである。事実、『記・紀』に垂仁・景行期の出雲の服属や雄略期の吉備氏、継体期の筑紫君磐井の反乱・服属の伝承が西国については伝えられているが、東国にはこのような顕著な反乱等の伝承はみられない。「西船東馬」と「叛乱・服属」がヤマト王権の東国・西国の支配の在り方に相違をもたらしたのではなかろうか。

(2)

7世紀の東アジアの情勢は、崇峻(すしゅん)2（589）年の隋の中国南北朝の統一、推古(すいこ)26（618）年の唐の成立によって激動の時期を迎えた。高句麗への遠征にみられる軍事的圧力、統一帝国の政治的圧力に曝された朝鮮諸国は、国内体制と対中国関係の再編・再構築に迫られ、その間にも三国の対立は激化した。こうした状況下では日本との友好的関係を求めることはあっても、日本への侵攻を企てる余力も必要性もなかったのである。新たな国際状況への対応を内外政策にわたって模索した朝廷は、推古8（600）年以降の遣隋使やその他からの情報を得たであろうが、外国の侵攻に備えた山城の造作を必要とする条件はなかったといってよいであろう。

ところで、②の朝鮮式山城の築造については、『紀』等に記載されるように、百済出兵による天智2（663）年の白村江大敗後の唐・新羅軍来攻の危機の対外的緊張の中で、翌天智3年の北部九州への防人(さきもり)・烽(とぶひ)の配置や水城の築造に始まる外敵防備の中核として、4年には亡命百済(くだら)人による大野城・基肄(きい)城と長門国の城、6年には金田城を築城を始めており（この頃に鞠智(きくち)城も築城か）、瀬戸内沿いには屋島城と大阪湾に面した高安(たかやす)城を築城している。これらの配置は北部九州を主に関門海峡から大阪湾に至る瀬戸内海沿いに、外敵に備える軍事施設として配されたものであり、王権＝天智(てんち)の意志と計画に基づくものであったことは否定できないであろう。ところが朝鮮半島では斉明6（660）年に百済を滅ぼした唐と新羅は、百済の支配と高句麗(こうくり)討伐をめぐって間隙が生じ、高句麗滅亡前後からの両者の対立は一層激しくなった。日本に対する遠交近攻策、自己の陣営への取込みからも侵攻の可能性は低くなり、天智10（671）年の唐使郭務悰らによる日本軍捕虜の送還は、そのことをわが国に明確に示すシグナルであったろう。その後の壬申(じんしん)の乱や律令制樹立への動きなど、国内情勢は①②のいずれの山城も新たに築城する状況にはなかったといってよいであろう。

一方、国家レベルの海外遠征軍の派遣で確実なのは、斉明の百済出兵と豊臣秀吉の朝鮮出兵である。彼等はその本拠地畿内を離れて西下し、遠征の為の根拠地として朝倉橘廣庭宮(あさくらのたちばなのひろにわのみや)と肥前名護屋城を造営した。朝鮮への出兵記事は6世紀以降の『紀』にみえているが、仮に事実としても朝廷の総力をあげた斉明朝の出兵に及ぶべくもない、小規模なものであったろう。推古9～11年に来目皇子や当麻皇子を将軍とする新羅出兵軍が2度筑紫に派遣されたと伝えるが、皇子の死などで実現せず、来目皇子の動きも「島郡に屯めて、船舶を集め軍糧を運ぶ」とあって、神籠石の築造を推測させるものはない。②の山城は敗戦後に外敵に備えて急遽築城されたが、外征出兵時に敗戦を想定して①の神籠石を予め築造したとは、②の事例からも考えにくいので